

大場磐雄博士資料の研究



大場磐雄博士(1899～1975)は、我が国における考古学上極めて独創的な研究体系を打ち建てた研究者として学史にその名を刻んでいる。博士は大正7(1918)年に國學院大學に入学する以前から考古学を志し、初期の頃は特に先史考古学を中心に研究を行っていた。現在の時代区分で縄文時代前期にあたる諸磯式土器を型式設定するなど、学史上記念すべき成果を残している。

大正14(1925)年に内務省嘱託となり神社局考証課に勤務、昭和2(1927)年に伊豆吉佐美洗田遺跡から三倉山を望んだ事がきっかけとなって神道考古学への第一歩を踏み出した。以来、安房神社洞穴遺跡(昭和7)、日光二荒山神社(昭和9)等数々の遺跡を調査している。また、博士の研究にとって重要な分野となる神社関係の調査も盛んに行い、宮地直一博士の下で『考古学講座 第16巻 神社と考古学』を作成し、昭和4年の遷宮を前にした神宮神宝の調査、鹿島神宮、香取神宮等著名大社の宝物調査を行い、『石上神宮神宝誌』『香取神宮宝物誌』等の編纂を行っている。

第2次世界大戦後の昭和22(1947)年からは静岡県登呂遺跡を調査、また、昭和25(1950)年からは長野県平出遺跡の調査を継続的に実施した。

大場博士と國學院大學とのかかわりは、大正7(1918)年に同大学に入学、大正11(1922)年に国史学科を卒業している。教歴としては昭和8(1933)年に附属高等師範部講師、昭和9(1934)年に予科講師、昭和10(1935)年学部講師、さらには昭和19(1944)年国学研究所研究員を経て、昭和24(1949)年に文学部教授に就任している。

大場博士はその研究資料の中に大量の写真等画像資料を残しており、これらは博士の学問的軌跡を辿れると同時に、現在ではすでに失われてしまった文化財や景観、日本考古学史上を彩る著名な研究者達の交流の軌跡を記録した資料として極めて重要な情報を今に伝えている。写真には考古学的な対象はもちろんであるが、建造物・美術工芸品・民俗芸能・人物など、神道考古学という極めて複合的、かつユニークな分野を確立した博士の研究成果を裏付ける、様々な貴重な対象が撮影されている。

大場博士の没後、これらの資料は一括して國學院大學に寄贈され、保管されてきた。資料は、ガラス乾板を主体とする写真資料(大場磐雄博士写真資料) 冊子や拓本、実測図などの周辺資料(大場磐雄博士資料)の大きく2つに分けることができる。

従来から、大場博士の日記である『楽石雑筆』との互換研究ができることから、考古学研究者をはじめとして、大場博士が発掘調査に関わった地域から画像資料についての閲覧が要望されるなど学術的価値の高い資料である。そこで、当プロジェクトでは、大場磐雄博士写真資料の画像資料の再生保存に関する作業と、大場磐雄博士の目録作成作業を開始し、これらの過程においてそれぞれのテーマに即した研究活動を行なった。研究成果は、Webページの作成をはじめとして、シンポジウム・フォーラム・研究会、目録や研究論文集の刊行という形で公にすることに努めてきた。詳細は次項以下と研究成果の公開活動を参照されたい。

(山内利秋・加藤里美)